

最狂公爵閣下のお気に入り3

登場人物紹介

シリウス

オルモード公爵家の当主。

その美貌、頭脳、破天荒な性格により「最狂公爵閣下」と呼ばれている。セレスティナを溺愛している。

セレスティナ

シリウスの婚約者。養父母に蔑ろにされていた境遇から救い出してくれたシリウスを一途に愛している。

イザーク

シリウスの息子。
シャロットとは双子。

シャロット

シリウスの娘。セレスティナを
実の妹のように可愛がる。

ジャネット

イザークと同じ剣術クラブに
所属している子爵令嬢。
男装の似合う凛々しい美女。

アンジェラ

セレスティナの学友。
甘いものが大好き。



第一話 王女の横恋慕

「マスター、失礼致します。セレスティナ様宛の手紙が届きました」

春の花が咲き乱れる、オルモード公爵邸のガゼボ。そこに姿を現したのは、金色ボディのマジックドール——スチュワートだ。公爵家の執事としての役割をこなしているが、実質シリウス・オルモード公爵の代理人でもある。

「ああ、こっちへ」

シリウスがそう指示を出す。セレスティナ・オルモードは、いつものようにシリウスに膝抱っこされ、ふわふわとした夢心地を味わっている最中だった。目の前のテーブルには、真っ赤な苺のスィーツがずらりと並んでいる。その菓子の一つ一つを、シリウスの手がセレスティナの口へ運ぶ。

「次はどれが食べたい？ これか？ ほら、口を開けて」

眩しいほど見目麗しい彼に、にっこり微笑まれ、セレスティナの頬が朱に染まる。料理長のプーシェが腕をふるった色鮮やかなスィーツより、シリウスの微笑みの方が数段甘い。そろりと口を開けると、シリウスの手によって苺のマカロンが運ばれる。甘酸っぱい苺の香りが口いっぱい広がった。

美味しい……

「こちらになります、セレスティナ様」

スチュワートが恭しく差し出した封筒には、王家の印が入った封蝋がある。セレスティナは、クラスメイトのエリーゼ王女からかと思つたが——違つた。

「エリザベス王女殿下？」

セレスティナは差出人を見て、不思議に思う。

第三王女のエリザベスはアルフレッド王太子の妹で、エリーゼの叔母にあたる、金髪色白美人だ。セレスティナが十六歳の時、婚約披露パーティーで一度会つたことがあるが、さほど親しくはない。むしろ彼女はシリウスに懸想していたので、セレスティナとは恋敵の関係だった。

シリウスに振られたあとは、私達の婚約を祝福してくださつたけれど……

彼女からの手紙とはなんだろう。不安は否めない。思い切つて手紙を読むと、エリザベス王女の高笑いがかえりきそうな内容だった。

『オルモード公爵に選ばれたあなたは、さぞかし幸せを満喫しているんでしょうね！ でもね、今のわたくしはそれ以上に幸せだと断言できるわ。とーっても素敵なのわたくしの婚約者ののろけ話をたつくさん聞かせてあげるから、是非お茶会へいらつしゃいな！ 来なかつたら恨むわよ？』

とまあ、こんな感じである。横からひよいと手紙を取り上げたシリウスは、手紙を読むなり眉間に皺を寄せ、着火具で手紙に火をつけようとする。

「待つて、待つて、私宛ての招待状よ？」

「行く気か？」

「せっかくのご招待ですもの」

「君に反感を持つているようだが」

そうかしら？

セレスティナは微笑んだ。

「きつと、幸せな自分を見てもらいたいのよ。私は行きたいわ」

セレスティナが自分の希望を口にする、一応、シリウスは了承してくれた。

「なら、ハロルドを連れていきなさい」

そう告げて。

「え？ ティナってば、エリザベス王女殿下のお茶会に招待されたの？」

公爵邸での夕食時、セレスティナから話を聞いたシャーロット——シリウスの娘で、セレスティナの義姉が、目を丸くする。公爵邸のダイニングルームは重厚かつ豪奢だ。王城のそれに勝るとも劣らない。

「ええ、素敵な婚約者ができたそうよ」

セレスティナはふわりと笑う。栗色の髪を飾るのは、先程ガゼボでシリウスが摘んだ春の小花だ。こういったこまやかな愛情表現は、いつだってセレスティナを幸せな気持ちにしてくれる。

「素敵な婚約者、ねえ……。エリザベス王女殿下って、確か……。パパに横恋慕して、婚約披露パー

ティーでティナにつつかかかってきたわよね？ パパにばつさりフラれて引き下がったけど……」
なのに、なんでティナを招待？ とかなり胡散臭げである。

「ね、お兄様。エリザベス王女殿下のこと、どう思う？」

話を振られて、シャーロットの双子の兄であるイザークは困惑気味だ。

「どうって……俺はあんまり彼女にいい印象はないなあ。俺達が王女殿下と顔合わせした時って確か、彼女が十二、三歳くらいの時だったけど……侍女にブスだのどろいだの言いたい放題だったんだぜ。んで、何が気に入らなかつたんだか、シャルに紅茶をかけようとして、逆に自分が頭から紅茶をかぶつちまつた……」

「ああ、あれ？ ほほほ、必殺ティーカップ返しよ！」

シャーロットが得意げに笑い、あんな攻撃、へでもないわと口にする。セレスティナはその時の様子を想像し、笑ってしまった。

シャルお姉様らしいわ。

「結局、王女殿下の方が泣かされたんだよな。王女よりずっと年下のシャルに反撃されて」

「そうそう、で、それつきりよね？ きつと、パパが交流を拒否したんだわ」

「次に会った時は、ティナの婚約披露パーティーの時だよな？ 容姿が激変してて、ゴージャスな美女になってたけど……父上にはつさり振られた」

「ええ、エリザベス王女殿下は、パパに気があつたのよね？」

あれは驚いたわとシャーロットが言う。

「交流はなかつたはずなのに、父上は王女にどこ気に入られたんだ？」

「んー……一目惚れかもよ？ ほら、パパ、ハンサムだもん。それもどびつきりの……」

シャーロットがシリウスに視線を走らせる。セレスティナも目を向けた。

そうね、確かに素敵だわ。

見つめるたびに、うっとりしてしまう。威風堂々としていて、片眼鏡をかけた顔はこれ以上ないほど整っている。肩からこぼれ落ちる白銀の髪が、その美を一層引き立てており、まるで精巧なピスクドールを目にしているかのよう。現時点で三十六歳だが、二十代に見えるというおまけ付きだ。イザークがため息まじりに同意する。

「まあなあ。けど、父上の本性を知ったら百年の恋も冷めると思うが……」

「ああ、常識外れの破壊魔だもんねえ。ついていけないの、ティナくらい？」

「何か言ったか？」

シリウスの低い声に、シャーロットとイザークがびくうと体を揺らす。

「なんでもありません！」

二人の声がきつちりハモった。シャーロットもイザークも、子供時代に散々やられたくすぐりの刑が未だに恐ろしいようである。

「そ、それより！ 明日から新学期よね！ ティナと一緒に二年生よ！ 楽しみい！」

シャーロットがことさら明るく言う。

セレスティナは無事、王立魔道学院の二学年に進級した。クラス替えはないので、シャーロット

とイザークはもちろん、仲良しのアンジェラとエリーゼも一緒である。

平民出のララ・ソーンは留年となり、お別れとなった。シリウスに横恋慕よこれんぼして、セレスティナに手を上げようとし、公爵であるシリウスの怒りを買ったからである。なので彼女だけ進級できず、今年もまた一学年で勉強だ。

「そうね、楽しみだわ」

ララ、どうかお母様と仲良くね。

同じ男性を好きになり、仲違いなかちがひしてしまったけれど、やはりララにも幸せになつてもらいたい——そう思うセレスティナだった。



「シリウスとお茶会？ あのエリザベスか？」

王城内の一室。優雅にお茶をたしなみつつ、第一王女のブリジッタが驚いたように言った。彼女はエリザベスの姉で、ブルネットの妖艶ようえんな美女、そして三十一歳の出戻りである。当時、恋人のいた男と王命を使つて無理矢理結婚しておきながら、加齢で太った夫に嫌気がさし、あつさり捨てたのだ。体のラインが崩れるからと避妊を徹底していたため、子供もない。

「いえ、違います。ご招待したのは、公爵様の婚約者の方ですよ、ブリジッタ王女殿下」

侍女長が訂正する。ブリジッタが美しい顔をしかめた。

「例のシリウスの婚約者ね。信じられない。あの女嫌いが婚約なんて青天の霹靂へきれきだわ。たかだか十代の小娘がどうやってあの堅物に取り入ったのかしら？ わたくしでさえ駄目だったのに」

ブリジッタがぎりつと赤い爪をかじる。侍女長がそつと言ひ添えた。

「いえ、公爵様は女嫌いというより、人間嫌いのようにお見受けします」

「ふん、同じじゃない。そういえば……エリザベスもシリウスに目をつけていたみたいね？ あの

不細工が、とんだ身の程知らずだわ」

「ブリジッタ王女殿下……」

侍女長にたしなめられるが、ブリジッタ王女はつんと顎あごを上げる。

「何よ、本当のことでしょう？ デブでブスで性格最悪だつて、有名だったじゃない」

「それは子供の頃の話ですよ、ブリジッタ王女殿下。エリザベス王女殿下は成人後、お美しくお優しくなりました」

ブリジッタがふんつと鼻を鳴らす。

「そんなもの……化粧でごまかしているだけでしょ？ ああ、やだよだ……そうだわ！ いいことを思いついた！ わたくしもエリザベスのお茶会に参加するわ！」

侍女長が目丸くした。

「ブリジッタ王女殿下が、ですか？」

「そうよ、当然でしょう？ 可愛い妹が主催するお茶会なんだもの」

可愛い妹……

侍女長にとっては、かなり違和感のある言葉だった。なにせ、ブスブスと言って幼いエリザベスを虐め抜いたのは、他ならぬブリジッタだったからだ。エリザベスはそれを真似て、侍女を虐めるという行為に及んでいたので、もとを正せば彼女が原因ということになる。

「エドモン、あなたも参加なさいな」
「僕も、ですか？」

ブリジッタの命令に、その場にいた彼女の情夫エドモンが困惑する。外聞が悪いので、表向き、彼の立場は従者だ。見目麗しい若者だが、情夫特有の色気と不健全さが同居している。

ブリジッタがにんまりと笑った。ほくそ笑むという言葉がぴったりだ。

「ええ、そうよ。セレスティナとかいう女はね、シリウスの補佐ができるくらい頭がいいらしいの。王立研究所の所長であるラザールも、彼女を研究員にしたがっていたでしょう？ ちょうどいいから仲良くなって、いろいろ情報を引き出して。うまくいけばシリウスを研究員として引っ張り込めるかもしれないわよ」

エドモンは渋い顔だ。

「オルモード公は、兄のラザールを嫌っているようですが……」

「だから、弟のあなたが頑張るのよ。誘惑は得意でしょう？」

「……オルモード公の婚約者ですよ？」

誘惑はまずいのは——そう言いたげだが、ブリジッタはどこ吹く風である。

「だから何？ 嫌なの？ ちよつとくらい好みじゃなくても我慢なさい」

ブリジッタは言い出したら聞かない。エドモンが諦めたように肩をすくめた。

「はいはい、分かりました。とにかく、仲良くなればいいんですね？」

「そうよ、いい子ね。期待しているわ」

ブリジッタはエドモンに口づけ、満足げに笑った。



「ご機嫌よう、セレスティナ嬢。お会いできて嬉しいわ」

セレスティナは目を見張った。王城に到着したセレスティナを出迎えたのは、なんとエリザベス王女本人だったのだ。王女である彼女自ら出迎えてくれるとは、随分な歓待ぶりである。

「本日はお招きありがとうございます、エリザベス王女殿下」

セレスティナは微笑み、淑女の礼をする。背後に付き従うのはマジックドールのハロルドだ。エリザベスがふわりと笑う。

「さあ、こちらへいらして」

花咲き誇る庭園に用意された席に全員がつくと、お茶会の開始である。

「ご婚約おめでとうございます、エリザベス王女殿下。とても素敵なお婚約者だそうですね」

セレスティナがそう挨拶をすると、エリザベスが妖艶ようえんに笑った。

「ふふっ、ありがとうございます。わたくしの婚約者はね、あの青薔薇あおばらの君、メイナード侯爵なの」

反応を確かめるように、エリザベスがセレスティナの顔を覗き込む。指に燦然と輝くエメラルドは婚約指輪だろうか。華やかなドレスを身にまとった彼女の顔は幸せそうに輝いていた。

メイナード侯爵……アッシュプロンドにダークグリーンの瞳の美丈夫よね。エリザベス王女殿下と同じ二十代。ドラゴンライダーの総団長で、王家主催のパレードでは必ず先頭に立っているわ。青薔薇の君という異名は、彼が家紋である青薔薇の装飾を好んで身につけるから。

エリザベスの頬は紅潮し、瞳は潤んでいいる。

「彼はね、笑顔がとってもチャーミングで素敵なの。立ち振る舞いも紳士的で優しいわ。頭もよくて将来有望よ。何より、わたくしをこの上なく愛してくれているの」

「相思相愛なんですね？」

「ええ、もちろんよ。幸せすぎて怖いくらい」

延々とのろけ話が続く。本当に婚約者であるメイナード侯爵のことが好きなのだと分かった。

よかった、とっても幸せそう……

セレスティナは胸を撫で下ろす。シリウスに振られてどうなったのか、気になっていたのだ。幸せになつてくれて本当によかったと思う。そこへ、別の声がまじった。

「あのう……お伺いしてもよろしいかしら？ あなたの婚約者である、オルモード公爵様のお年は……」

発言したのは、大人しそうな伯爵家のご令嬢だ。

「あの……三十六歳です」

もじもじとセレスティナが答える。

「政略結婚ですか？」

「いえ、その、恋愛結婚です」

セレスティナの返答で場がどよめいた。驚いたらしい。

「なら、セレスティナ様は、お年を召した方が好きなんですね？」

お年を召した方——そう言われて、セレスティナは困ってしまった。もの凄く違和感があるからだ。シリウスの見た目は二十代である。セレスティナは、ちらりと集まっている貴婦人達を見た。ここにいる方達は、シリウスと面識がないのかしら？

「あるいはお金目当て、とか？」

こそりと意地悪く言う人もいて、いたたまれない。セレスティナは身を縮めた。

「そうよねえ、なんていったって公爵様なもの」

「オルモード公爵家の財力、権力は、王家に匹敵するって聞くわ」

「でも、二十近くも年上の殿方はちよつと……」

「そうよね、それなら格下の爵位でも、年齢的に釣り合う方がいいわ」

これに声を荒らげたのがエリザベスだ。

「何よそれ！ 失礼な！」

貴婦人達が目を見張った。

「オルモード公爵のどこが年寄りよ！ 信じられない！ もの凄く素敵なんじゃない！ 相思相愛

の恋愛結婚のどこがおかしいのよ！ あなた達だって一目見れば、ころっとやられるわ！」

エリザベスの剣幕に、周囲の者達は狼狽える。

「で、でも、エリザベス王女殿下も、ご自身の婚約者の方が比べものにならないくらい素敵だと……だからつきり、セレスティナ嬢をこき下ろしたいのかと思つて……」

どうやらエリザベスのご機嫌を取ろうとしたらしい。

エリザベスは顔を真っ赤にして怒つた。

「そんなわけないでしょう！ うんとのろけて、セレスティナ嬢に安心してもらおうとしただけよ！ じゃないと、セレスティナ嬢と仲良くなんてできないでしょう？ 愛しの旦那様に懸想していた女なんて、わたくしだったら蹴るわ！ 仲良く？ 無理無理無理！」

その場が、しんと静まりかえる。

「え、と……」

「つまり王女殿下は、セレスティナ嬢と仲良くしたいということですか？」

「当たり前でしょう！ じゃなかったら、なんでお茶会に呼ぶのよ！ まさか集団で虐め抜くとか思つてないでしょうね？ わたくしはそこまで性格悪くないわよ！ そ、そりゃ、昔は、ちよこつと意地悪だつたけど！ こ、子供の頃の話よ！ 今はちゃんと改心したわ！」

顔を真っ赤にしてぷいっとそっぽを向く。ついで、ちらりとセレスティナに目を向けた。

「ま、まあ、ちよこつとは？ うんとのろけて、わたくしを振つたことを後悔させてやろうかな、とか思つたけど……そ、それくらいの意地悪は許されるはずよ！ こんなにいい女を振つたんです

からね！」

その様子に、セレスティナはつい笑みをこぼしてしまった。

「ええ、王女殿下はとても素敵です」

セレスティナがそう言うと、ぐぐつとエリザベスが身を乗り出した。

「そうよね？ わたくしはいい女よね？ オルモード公も少しは後悔……は、無理かしら？ あなた、とっても綺麗になつたわ。もう立派な淑女ね」

ため息まじりに褒められて、こそばゆい。

「あ、ありがとうございます」

「出会つた時は本当にお子ちゃまだつたのに……。女は愛されて美しくなるって本当ね」

「お、王女殿下もお美しいです」

顔を赤く染めたセレスティナが、もそもそと言う。エリザベスは女の色気が凄い。目のやり場に困るくらいだ。エリザベスが意味ありげに笑つた。

「これは努力のたまものよ。うんと磨いたもの。ああ、そうそう、せっかくだから、あなたにものろけてもらおうかしら」

エリザベスが茶目つけたつぷりに言う。

え？ 私も？

「だって、ねえ……財力や権力目当てだなんて失礼しちゃうわ。まるで悪女扱いよ。でも、まあ、そういう噂が社交界で蔓延しているから、いつそこで払拭しちゃうさない」

噂には噂で対抗するの——エリザベスがひっそり囁いた。

え、蔓延^{まんえん}？

「ほら、オルモード公は、社交場に滅多に顔を出さないのよね。それでいて写真嫌いだし？ 自分の顔が出回らないよう手を回しているのよ。だから、彼と付き合いない若者達の間で、あなた達のことをお金目当てだとか、政略結婚だとかって噂が先行しているの。わたくしのように内情を知っている者は、そういう……でも、のろける……？ な、なんて言えばいいの？」

ああ、そういう……。でも、のろける……？ な、なんて言えばいいの？
セレスティナは顔が火照^{ほて}るのを感じた。

「背は？」

「高い、です」

エリザベスの質問にセレスティナが答える。

「雰囲気」

「厳格そう」

「あなたにも？」

「え、えと……優しい、です」

そう、困るくらい優しい。シリウスの甘やかしは際限がない。

「キスは？」

「とっつもうまい……じゃ、じゃなくて！」

言わせないでえ！

セレスティナはしどろもどろだ。けれど、そんな反応すら面白いらしく、エリザベスはたたみか
けてくる。

「言われて一番嬉しい言葉は！」

「私のティナ……あああ！ エリザベス王女殿下が言われて嬉しい言葉はなんでしょう？」

エリザベスが妖艶^{ようえん}に笑った。余裕ありげに、ふあさつと金の髪を掻き上げる。

「ああら、反撃？ もちろん『私のリズ』よ。そして愛してるって囁いてもらう時ね！ 婚約時の
プレゼントは百八本の赤い薔薇^{ばら}よ。誕生石のルビーのネックレスは彼につけてもらったわ、うふふ
そして、綺麗だつて……ええ、もう、世界一可愛いって、やあん、もう！」

頬を赤く染め、身をよじっている。あっさりと自分の世界に入り、延々のろけるエリザベスを前
に、セレスティナはほっと胸を撫で下ろす。助かった、と。

そこへ近付いてきた二つの人影が、会話を割って入った。

「——わたくしも参加させてもらってもよろしくて？」

声の主を見て、セレスティナは驚いた。面識はないが、貴族名鑑で顔は知っている。エリザベス
の姉、第一王女のブリジッタである。ブルネットの妖艶^{ようえん}な美女で、彼女の後ろに控えている従者は、
退廃的な雰囲気^{ふんいき}を漂わせた美青年だ。

「ブリジッタお姉様……」

エリザベスは舌打ちでも漏らしそうな雰囲気だ。招かれざる客といったところか。

「セレスティナ嬢はどちらの方かしら？」

ブリジッタ王女がそう問う。セレスティナは立ち上がり、淑女の礼をした。

「は、はじめまして、ブリジッタ王女殿下。私がオルモード公爵の婚約者で、セレスティナ・オルモードと申します。以後お見知りおきを」

セレスティナが挨拶をすると、他の貴族令嬢もそれに倣う。

「……どういう風の吹き回し？」

エリザベスが警戒心も露わに言う。彼女の反応で姉妹仲はよくないのだと察し、セレスティナは落ち着かない。ブリジッタが余裕綽々の笑みを浮かべた。

「あらあ、可愛い可愛い妹の顔を見に来たのよ？ それに、シリウスの婚約者の顔を見てみたかったの。邪険にしないわよね？」

ちらりとブリジッタがセレスティナを見やる。エリザベスが不快そうに顔をしかめた。

「オルモード公よ、お姉様。彼女の前で名前呼びは失礼だわ」

「堅いこと言いっこなし、ね？ わたくしとシリウスはとっても仲良しなんだから」

「……聞いてないわよ、そんなの」

「そりゃあね？ わたくしが成人した時、あなたはまだまだお子ちゃまだったし？ 異性の話なんて、わたくしとしたことないじゃない。あ、お茶、お願い」

侍女に椅子を用意させ、ちゃっかりセレスティナの隣に腰かける。

「ね、早速なんだけど、あなた、どこでシリウスと知り合ったの？」

ブリジッタは愛想よく笑うが、セレスティナは身を硬くした。

シリウス……名前呼び……

胸がもやもやするけれど、親しい友人のようだからとセレスティナは自分を納得させる。

「そ、その、私のお誕生日会に来てくださいました」

「お誕生日会……そこで見初められたってこと？」

「いえ、その……最初は魔工学の才を見込まれて養女縁組を打診されました。交流を深めるうちに伴侶にと望まれたんです」

ブリジッタがぼかんと口を開けた。

「え？ ということは、シリウスの方から言い寄ったの？ あなたに？」

「いえ、その……」

セレスティナは言い淀む。そこは自信がない。言い寄ったのは自分からだったような気がする。

——大人になって、その時に改めてシリウス様に求婚します。

求婚を断られたあの時、自分は確かにそう言った。

シリウスが恋愛感情を持ってくれたのは、一体いつからだったのかしら？

「シリウスは私の憧れの人で……」

「じゃ、あなたから言い寄ったのね？ うっわ、なんって身の程知らずな！」

「お姉様！」

エリザベスが声を荒らげた。

「何よ、本当のことじゃない。たかが伯爵令嬢が公爵に言い寄ったのよ？ 娼婦と変わらな……」
「教育的指導」

背後にいたハロルドから警告音がビーツと鳴り響き、ブリジッタが手にしていたカップがチュド
ンと爆破される。ハロルドから発射された光弾で木々端微塵だ。お茶会の場が一瞬で凍りつく。

「は、え……ええ？」

持ち手だけとなったカップの残骸に全員視線が釘付けになった。ハロルドが淡々と言う。

「……ブリジッタ王女殿下、迂闊なことは口になさらないよう、お願い致します。セレスティナ様
を侮辱なさいますと、おそらく王女殿下でも報復されます」

「な、何よそれえ！ 陛下が黙っていないわよ！」

ブリジッタの父親は現国王である。が、ハロルドの表情に変化はない。

「申し訳ありませんが、カップの爆破は私の意志ではありません。マスターの手でそうプログラム
されていて、拒否は不可能です」

「セレスティナ嬢を侮辱したと感じると、勝手に攻撃するってことなの？」

「端的に言えばそういうことです」

「ちよっとおお！ 下がちなさい、あなた危険よ！」

「命令できるのはマスターと、サブマスターであるセレスティナ様だけです」

「だったら、あなた！ 下がるように言いなさい！」

ブリジッタがセレスティナに命令する。

「それは……」

セレスティナは困ってしまった。ハロルドを危険視するブリジッタ王女の気持ちは分かるが、ど
うしても彼を下がらせる気にはなれなかった。従者として信頼しているからである。そこへ、エリ
ザベスが割って入った。

「お姉様、待って！ セレスティナ嬢はわたくしが招待したのよ？ わたくしの客人よ。そしてこ
こはわたくしが主催するお茶会なの！ 嫌なら出て行って！」

「何よ、わたくしは姉よ！ 逆らう気？」

「ええ、ええ、言わせてもらいますとも！ 無礼なのはお姉様の方よ！」

「ブリジッタ王女殿下、ここはひとつ穏便に……」

後ろに立つ従者を取りなすと、ブリジッタは渋々引き下がる。従者が代わりのように謝罪した。
「私はブリジッタ王女の従者、エドモン・フリックと申します。申し訳ありませんでした、セレス
ティナ様、どうか気を悪くなさらないください」

エドモンが浮かべたのは、蕩けるような甘い笑みである。優雅な仕草でエドモンがセレスティナ
の手を取り、そこへ口づけしようとした瞬間、今度はハロルドの腕が魔砲弾のように飛び、エドモン
を吹っ飛ばす。

「ほほう！」

「きゃあ！ エドモン！ ちよっとお！」

「申し訳ありません、プログラムです」

ハロルドの声が淡々としているせいか、謝っているようにはまったく感じられない。

「あ、あの、ごめんなさ……」

「エドモンはセレスティナ嬢に謝っただけでしょう？ 何に反応したのよ？」

セレスティナの謝罪をぶった切り、ブリジッタがハロルドに詰め寄った。

「多分、口づけでしょう」

口づけ……そうかも……

セレスティナは納得してしまふ。ブリジッタはますますいきり立った。

「何よ、それ！ 手の甲でしょう？ 単なる挨拶じゃない！」

「マスターはもの凄い焼きもち焼きなんです。セレスティナ様の体に触れるだけでアウトです。異性に見られるのが駄目で、触れられるのはもつと駄目です」

ブリジッタが目を剥いた。

「嫉妬って……何よそれ。あの堅物が嫉妬？ まさか、シリウスはそこまでセレスティナ嬢に惚れ

抜いてるってこと？」

うっそ、信じられない、とブリジッタがぶつぶつ呟く。

「ええ、はい、溺愛です」

「嘘嘘嘘！ わたくしの方がずっといい女よ！ なんでそんな小娘に！」

そこへ、居丈高いさだかに割って入ったのはエリザベスだ。

「違うわ！ お姉様より、わたくしの方がずっといい女よ。この年増！」

おーほほほつという、悪役張りのエリザベスの高笑いに、ブリジッタが声を荒らげた。

「な、なんですってえ！ 妹のくせに生意気な！」

「そうよ、妹よ？ だからお姉様より若くてぴつちぴちなもの！ かるーくお手入れしただけでお肌なんかぴつかぴかよう！ 年増のお姉様と違ってね！ 子供の頃は八歳も年下で、お子ちゃまなん言われて悔しい思いを散々したけれど！ 今は感謝しているわ！ 若いっていいわねえ！」

小さい頃、散々虐められた仕返しだろうか、エリザベスがこぞとばかりに言い返す。お茶会の出席者は全員、置いてけぼりだ。

「こ、の……」

「でもねえ、それってセレスティナ嬢にも言えるの。小娘？ ほほほ、負け惜しみ言っちゃって。十七歳はね、娘盛りよ！ あと二、二年もすれば、今度は教養ある美しい女性としてもはやされるわ！ セレスティナ嬢は成人して社交デビューすれば、若い男にモテモテよう！ その頃にはお姉様は下り坂ね！ って、あらあ、ごめんなさあい。お肌の曲がり角は二十五歳からっていうから、もう下っているわね！」

「言わせておけば！」

頬を引っぱたこうと振り上げたブリジッタの手を止めたのは、エドモンだ。

「待ってください、王女殿下、喧嘩はまずいですよ」

——オルモード公爵令嬢と親しくなって、王立研究所の発展に協力して欲しいのでしょうか？

エドモンにそう囁かれて、ブリジッタは渋々引き下がる。

「そうね、ここで争つても無意味よね。仲直りしましょう、エリザベス」
「……謝るのなら、セレスティナ嬢に謝って」

ブリジッタは悔しそうに唇を噛み、セレスティナにちらりと目を向ける。

「許してくださるかしら？」

「え、ええ。喜んで」

差し出されたブリジッタの手をセレスティナは握り返した。



再び始まったお茶会で、ブリジッタはじつとりとした目をセレスティナに向けていた。

「ブリジッタ様、どうなさいました？」

「……どうって、あのマジックドールが鬱陶しいわ。びったりひつついて離れないの」

催淫魔薬入りの小瓶を弄ひつつ、ブリジッタが愚痴る。ハロルドの監視の目が光っていて、どうしても、セレスティナの飲み物に薬物を混入できない。妹のエリザベスと談笑するセレスティナを見つめるブリジッタの目は陰鬱だ。情夫エドモンが囁く。

「まあ、確かに。でも、悪口を口にしなければ大丈夫では？」

そういう問題じゃないのよ。

ブリジッタは心の中で憤る。

わたくしを拒絶しておきながら、こんな小娘を伴侶に選ぶなんて……

セレスティナが着ているのは華やかな青いドレスで、首元を飾るのはプラチナとダイヤモンドのネックレスだ。シリウスの色をまとうセレスティナを前に、イライラして仕方がない。

本当なら、わたくしがそうなるはずだったのに。

シリウスが身にまとう空気が拒絶的だ。青く美しい双眸は冷たく、他を寄せつけない。けれど、それがかえって彼の美しさと神秘性を高めていた。彼に惹かれる心を抑えきれず、ブリジッタは何度もシリウスに言い寄ったが相手にされなかった。あげく、当時シリウスの妻だった女——ドラゴンのサマンサに髪をちりちりにされ、命の危険を感じ、ようやく諦めたのだ。

その後、シリウスの姿を思い描きながら、ブリジッタは何度も他の男に抱かれた。手に入らないから、代用品で我慢したのだ。なのに……

こんな小娘がわたくしのシリウスを手に入れるなんて、許せない！

欲しくて欲しくてたまらなかったものを、自分より何もかも劣る女が手に入れる。憤懣やるかたない。ブリジッタは手にした催淫魔薬の小瓶をぎゅっと握りしめた。

——効果抜群ですよ、奥様。

怪しげな店の店主は、そう言つてにたりと笑った。そのことを思い出したブリジッタの口角も同じように上がる。店主の物言いに犯罪の匂いを感じたが、ブリジッタには関係なかった。重要な効果である。

下賤な男があなたにはお似合いよ。たっぷりと可愛がつてもらうのね。いっそ、その現場をシリ

ウスに見せてやろうかしら。男達に散々襲わせたあとは、そうね……顔に火傷でも負わせてやるわ。惨めに捨てられればいいのよ。

ブリジッタがにんまりと笑う。

お茶会が終わっても、ブリジッタの手には催淫魔薬の小瓶が握られたままだった。ブリジッタは憎々しげに、帰途につくセレスティナの背を睨みつけた。

◇ ◇ ◇

「で？ ブリジッタ王女殿下に乱入されたってわけ？」

セレスティナの部屋に押しかけ、お茶会の様子を聞いたシャーロットが憤慨する。

「ええ。私が婚約者なのが気に入らなかつたみたい。伯爵家と公爵家とでは不釣り合いだって」

「何言っているのよ。全然おかしくないわ。伯爵家ならぎりぎり王太子殿下とだって結婚できるじゃない。単純にティナに難癖つけたかっただけよ。もしかして、パパに気があるのかしら？」

セレスティナは首を捻る。

でも……ブリジッタ王女殿下は既婚者じゃなかつたかしら？

セレスティナはそう思うものの、確かに突っかかり方は気になった。だが、文句があるのなら、婚約式の時に言いそうなものだ。そう、エリザベス王女殿下のように。

あの時は何も言わなかつたのに、どうして今更？

「ああ、ブリジッタ王女はつい先頃、離縁しているな」

夕食時、シリウスにそう告げられ、セレスティナは驚く。

「別れたの？ どうして？」

シリウスが手にしたワインを揺らす。

「性格の不一致とか取り繕っていたが、単純に夫の見た目が気に入らなくなったようだ。夫の体重が結婚時の倍になったそうだ。ストレスで食物の過剰摂取をしたことが原因らしいな」

ストレスによる過剰摂取……まさか、王女殿下のせいじゃないわよね？

「ティナ。ブリジッタ王女殿下が気に入らないのなら、無視して構わない」

シリウスにそう言われ、セレスティナは戸惑った。

王女様を無視するのはよくないのでは？

「あるいは、王太子殿下に抗議して接近禁止令を出してもらってもいい」

「いえ、あの、大丈夫よ。そこまでしなくても」

セレスティナは慌てて話題を変えることにした。

「シャルお姉様」

「なあに、ティナ」

シャーロットはデザートの苺ゼリーに夢中である。

「次の休日にはクローディア王女殿下がいらっしやるわ。大丈夫かしら？」

クローディアは狼獣人で、ガルトス獣王国の第三王女だ。狼の耳とふさふさの尾が特徴の、浅黒い肌と金色の瞳をした人懐っこい女の子である。カナリアを模した魔道カラクリを、セレスティナが修理したことで仲良くなった。

「ええ、いいわよ。わたくしの背に乗りたいていう例のあれね？ 大歓迎よ」

シャーロットが意気揚々と請け負った。

半竜であるシャーロットとイザークは、二十歳を過ぎると、ドラゴンの姿になることができる。なので、あと三年も経てば、二人はドラゴンの姿になれるというわけだが、裏を返せばあと三年は変化できない。

その縛りを解消してくれるのが、「妖精の悪戯」という魔法の果実だ。シャーロットとイザークの祖父アルゴンが誕生日にプレゼントしてくれたもので、葡萄のように芳醇で甘いそれは、口にすると半日だけ二十歳の姿になれるのである。そのため、その実を口にすれば、シャーロットとイザークはドラゴンの姿になれる。ちなみに、二十歳を超えた者が妖精の悪戯を口にしても若返ることとは無い。あくまで、子供を大人にする果実なのである。

「ようこそ、クローディア王女殿下。お待ちしておりました」

オルモード公爵邸に遊びに来たクローディアに、セレスティナは挨拶をする。

相変わらず子犬みたいで可愛いわ。

セレスティナの口元が自然とほころぶ。遊びに来られたことがよほど嬉しいのか、クローディア

のふさふさの尾っぽが先程からぶんぶん揺れっぱなしだ。クローディアが元氣よく挨拶をした。

「ティナお姉様、本日はお招きありがとうございます！ とっても嬉しいですよ」

クローディア王女はセレスティナを慕い、ティナお姉様と呼ぶ。恐れ多くて最初は辞退したのだけれど、どうしてもと、押し切られた形だ。

クローディアが純真無垢な目を、セレスティナの横に立つシリウスに向けた。

「オルモード公爵様もお変わりなく……そうそう、兄のエルランドが、オルモード公爵様の銃の前を絶賛していました」

銃の腕前を絶賛？

セレスティナが不思議に思っていると、背後に控えていた銃騎士のダグラスがひそつと囁いた。

「公爵様の銃の腕前は超人級ですよ。一度ご覧になるとよろしいかと」

特級銃騎士のダグラスが褒めるほどの腕なのだど理解し、セレスティナの心は浮き立った。

そうなのね。凄いわ。

「兄は、アルカディアで毎年おこなわれている射撃大会で、公爵様と一度、腕を競いたいらしいですよ。でも……公爵様が毎年二位なのはどうしてなのでしょう？ オルモード公は一位じゃなきやおかしい！ と兄が憤慨していました。が、本番に弱い質なんですか？」

「いえ、二位が好きなのです」

シリウスがきっぱり言い、にっこり笑う。すると、ダグラスがぶふつと噴き出した。クローディアが目を見つめる。

「は？ え？ 二位が好き、なんですか？」

「ええ。そうです、王女殿下」

シリウスの笑顔はなんとも魅力的だ。再びシリウスに言い切られて、クローディアは額面通り受け取るしかないようだ。肩を震わせ、笑いをこらえているダグラスに、セレスティナがひそつと問うと、彼は事情を教えてくださいました。

「公爵様はね、『勝利の女神様』からのキスが嫌なんですよ」

勝利の女神様……ああ、神殿で選ばれる女神役の人ね。

射撃大会の優勝者にはトロフィーと賞金、それから勝利の女神からのキスが贈られるのが通例だ。くつくつ笑いつつダグラスが説明する。

「公爵様が初参戦で優勝した時は、当然のようにキスを辞退したんですがねえ。困ったことに神殿から選出された女神役の女性が、公爵様へのキスをなかなか諦めてくれなかったんですよ。すったもんだのあげく、公爵様が脅して引き下がらされました。こっ、妖蛇をね？ 腕に絡ませてシャーツ！ それ以降、絶対一位にはならないんです。俺なら喜んで受けませんがね」

そう耳打ちされて、セレスティナは笑ってしまった。シリウスは男女問わず人との接触が苦手だ。素手の握手すら嫌がるのだから、頬であつてもキスなどもつてのほかであるう。

「では、王女殿下。こちらへどうぞ」

セレスティナをエスコートしつつ、シリウスがクローディアを応接室へ促した。



頭でつかちの猿が……

そう心の中で罵つたのは、クローディアの侍女、豹獣人のカーラだ。

主の手前、大人しくしているが、心の中は先程からずっとセレスティナに対する罵声が溢れている。人間など脆弱で、くだらない下等生物、それが獣人達の共通認識だ。なのにその人間と高貴な自分の主人が仲良くするなんて、憤懣やるかたない。

一方、豪華なテーブルセットに腰かけたクローディアは、そんなカーラの心中など察することなく、セレスティナが作った赤いカナリアの魔道カラクリを見て、大喜びだ。

「ティナお姉様、凄いです！」

クローディアに褒められ、セレスティナは嬉しそうだ。

「王女殿下がお持ちの魔道カラクリを再現したんです。よろしければ、プレゼントしますわ」

「本当ですかあ！ ありがとうございます！」

喜ぶクローディアの背後で、カーラはふんつと鼻を鳴らす。

は、これのどこが凄いのか……ピーチクさえずる鳥を作っただけじゃないの。なんの役にもたない。どうせなら伝書鳩の代わりでもさせなさいよ。

「……そろそろ時間だ」

シリウスが懐中時計型指令機を手に立ち上がった。カーラはこの男も気に入らない。



何様？ くつそ偉そうな態度が鼻につく。エルランド殿下は随分と買っているようだけれど……
——あいつ、絶対つえーぞ？ 一対一で獣人とやり合っても勝つかも。

そんなことを嬉々として言っていた。

人間ごときが、一対一で獣人とやり合って勝てるわけがないじゃない。魔道武器とやりに頼り切り、徒党を組まなければ何もできない連中よ。エルランド殿下も大概だわ。人間の武器なんかに興味津々で、本当、あの方は変わっている。

「ティナ、防寒具を」

「ありがとう」

シリウスがセレスティナにふわりとマントを羽織らせ、いつものように唇にキスをする。セレスティナを見下ろす眼差しは、蜂蜜のように甘い。普段は氷湖のように冷たい彼の瞳が、彼女を前にするとこんな風に蕩けるのだから驚きだ。セレスティナの恥じらうような笑みもまた彼に対する愛しさに溢れていて、何気ないやりとりなのに、想い合っているのがよく分かる。そんな仲睦まじい様子に目を細めたのがクローディアだ。

「仲がいいですよ。素敵ですう」

どうやら二人の姿は理想らしく、クローディアが憧れの眼差しを向けつつ褒める。

カーラはふんつと鼻を鳴らした。面白くない、そう言いたげに。

シリウスとセレスティナの背を追い、クローディアと共に庭に出たカーラは、そこで目にした光景に度肝を抜かれた。

なんと、白銀色に輝く銀竜とルビーのような輝きを持つ赤竜がいたのだ。亜竜ではない本物のドラゴンの迫力に圧倒される。

「シャルお姉様、イザークお兄様、空のお散歩はどうだった？」

セレスティナが笑いかけると、銀竜と赤竜の尾っぽがびこびこ揺れた。

「もう、最高！」

「そそそ、肩慣らしは終わりだ、ほら、ティナ、乗った乗った。行こうぜ？」

銀竜と赤竜がそう答える。

「ド、ドドラゴン？ な、なななななんですか？」

「カーラはお留守番ね」

完全に腰の引けているカーラに向かって、クローディアがニッコリと笑う。

「はああ？ そ、それは、どういふことですか？ 王女殿下」

「シャーロット様がね、ドラゴンに変化して、背に乗せてくれるって、約束してくれたのお！ もうもう、感激だわ！」

クローディアが目を輝かせ、カーラはぼかんとした。

「シャーロット様はね、半竜なのよ！ 凄いわぁ！ ドラゴンとのハーフよ、ハーフ！ ほら、見て！ 銀竜がシャーロット様で、赤竜がイザーク様よ！」

クローディアの言葉にカーラは目を剥いた。二体のドラゴンをまじまじと見上げてしまう。

ハーフ？ ドラゴンと人間の？ シャーロットとかいう娘が？ え？ 何？ じゃ、オルモード

公はドラゴンの妻を娶ったってこと？ あ、あ、ありえない！

カーラは内心そう叫ぶ。いや、もはや絶叫だ。力が正義という価値観を持つ獣人にとって、ドラゴンは至高の存在で、神様扱いしていると云ってもいい。

「うっそお！ なんて？ なんて崇高なドラゴン様が、人間！ 頭でっかちの猿なんかとくつつくの！ ありえない！ ドラゴン様の弱みでも握ったの？ こんの卑怯者！ 恥知らず！」

とうとうこらえきれず口に出して叫んでしまう。

ぴぎっとシリウスの額に青筋が浮かぶ。セレスティナが声を荒らげた。

「なんてことを言うのよ！ 恥知らずなのはあなたの方だわ！」

大人しそうな人間の女から反論されて、カーラは一瞬たじろぐ。セレスティナがたたみかけた。

「シリウスはね、愛する人の弱みを握って脅すなんて真似は絶対にしないわ！ 謝って！」

「そうよ、カーラ！ 失礼だわ！ 謝りなさい！」

主人のクローディアにまで責められて、カーラはたじたじた。

「あ、あの、王女殿下？ お言葉ですが、私は何も間違ったことは申し上げておりません。王女殿下のような高貴な方が、このような身の程知らずな羽虫風情と仲良くなさるのはいかがなものかと……」

「パワードスーツ装着」

シリウスの声が響いたかと思うと、白銀色に輝くブーツが彼の体を覆う。そしてシリウスはカーラの襟首をひつつかみ、飛び上がった。

「シリウス？」

「パパ？ どこへ行くの？」

セレスティナとシャーロットの呼びかけは、地上に置いてけぼりである。

「なななな、何よ、何よ、これえ！」

仰天したカーラが泣き叫ぶが、地上は既に遙か下だ。

「……空の散歩だ。雲の上から落としてやるから、自力で帰れ」

シリウスが吐き捨て、カーラは目を剥いた。

「ちよ、待つて待つて待つて！ それ、流石に死んじやう死んじやう死んじやう！」

「人間の私が平気なんだ。当然、平気だよな？」

「あ、あああんた、空飛んでるじゃない！」

「そうだな、それが？」

「魔道具の力に頼ってるくせに！」

「知恵は人間の武器だ。それを磨き上げた結晶がこれだ。生まれ持った身体能力に胡座をかき、努力もしない阿呆が何を言う。このぐーたらが。だから、こーいう目にあう。寝言は寝て言え」

「卑怯者おとおお！」

「鳥は空を飛べる。鳥ができるのだから、当然お前にもできるだろう？」

「できるわけないわよ！ 豹獣人だもの！ 鳥とは……」

「そう、身体的な特徴が違う、できることが違う。人間は？」

「は？」

「人間にはお前達のような牙も鋭い爪もなく、聴力視力筋力持久力、どれをとっても遠く及ばない。なのに、道具を使わず、お前達獣人と同等のことをしろという。翼がないのに、鳥のように高く空を飛べという無茶ぶりどころが違う」

「そ、それ、は……」

「知恵こそが人間の牙なんだ。それを使うなということはお前達の身体能力を使うな、鳥に向かって翼の使用を禁じる、と言うのも同然。馬鹿馬鹿しい。本当に獣人どもは傲慢でどうしようもないぐーたらだ。では、さよならだな？」

「ま、まってえー！」

既に雲の上だ。獣化しても、流石にここから落とされたら命はない。

ご、ごめんなさい、と蚊の鳴くような声でカーラは謝った。

「……聞こえんな？」

シリウスの言いようにカーラは目を剥くも、どうしようもない。不承不承、何度も何度も謝るが、そのたびに、聞こえんな、と繰り返される。

「聞こえないって！ 聞こえてんじやないのお！」

カーラがいきり立ち、シリウスがにいつと笑う。

「人間だからな、残念ながら耳が悪いんだ、お前達と違って。力の限り叫べ。でないと聞こえない。ああ、流石に手が痺れてきた。落とすか」

「待つてえええええ！ ご、ご、ごめんなさい！ わ、私が悪うございましたあああ！」

「ね、シリウスはガルトス獣王国で作られた魔道具を見たことがあるのかしら」
セレスティナがそう問うと、シリウスが頷く。

「ん？ ああ。何度も」

「あその魔道具はどう？」

「そうだな……一言で言えば骨董品だ」

骨董品……

「そうだ、まるで進歩がない。百年前の技術をそのまま使っている。技術の継承という意味ではないのだろうが……君も知っての通り、ガルトス獣王国に魔工技師はいない。だから、ガルトスで生産される魔道具は、いまだに魔道師一人一人の能力に依存していて、作り手によって性能にひどいばらつきがある。素晴らしいものと、そうでないものの落差が非常に大きい」

「……獣人達は魔工学を学ぼうとは思わないのかしら」

セレスティナはそこが不思議だった。魔工技師が使う魔法——魔工学は性能のいい魔道具の大量生産を可能にしてくれる。国民の生活がずっと豊かになるだろう。なのに、獣人の多くは魔工技師を嫌う。何故？ と思わずにいられない。

「ふ、ふふ……魔工学は人間が生み出した魔法だから、彼らのプライドが許さないんだろうな」

「プライドって……」

セレスティナは絶句してしまふ。

人間が作った魔法だから、排斥はいせきするってことなの？ 確かに魔工学の基礎を作ったのは、ユリウ

ス・サウザーという人間の魔工技師だけれど……

ユリウス・サウザーは三百年ほど前、彗星すいせいのように現れた魔工技師で、魔工学というまったく新しい学問——数式化した魔法を生み出し、現代文明の基礎を築いた人物である。

その時、セレスティナのポーチの中から妖蛇のペロがひよっこり顔を出した。シャーシャーと何かを言っているように見える。ペロはシリウスが呼び出した子供の妖蛇で、セレスティナと友達になってくれた子だ。ペロという名前はセレスティナがつけた。見た目は小さな紫銀色の蛇だが、れっきとした魔獣なので知能は高い。

「落ちたら大変よ？ 中へ入っていて？」

そう告げると、ぴよこつと出ていた紫銀色の頭がすりと引つ込んだ。セレスティナの言葉を理解しているのだと分かる。でも、自分にはペロの言葉が分からない。残念だった。

「……なんて言っていたのかしらね？」

「君はいつ見ても綺麗だと」

シリウスの声がそう告げた。

ペロが褒めてくれたってことかしら？

片眼鏡をかけたシリウスの端正な顔に微笑みが浮かぶ。ふっと不思議な感覚に囚われた。

「ペロが褒めても怒らないのね？」

「あれの視線に性的な意味はないからな」

笑うシリウスの顔をじつと見つめていると、シリウスはすいっと視線を逸らした。

「……恋愛対象になる相手の場合は駄目だ。君が綺麗、可愛いと言われると、どこを見ていると言いたくなる。よからぬ妄想をされそうで。考えすぎだ、心が狭いと言われればそれまでだが、とにかく、駄目なものは駄目だ。受け付けない。異性に君を見て欲しくない、褒めて欲しくないんだ」

「……なんとなく分かるわ」
そうよ、淫魔のアニーが、シリウスに迫った時がそうだったもの。彼女は明らかにシリウスを性的対象として見ていて、ひどく不快だった。ねつとりと絡みつくよう、冒瀆ぼうとく的な視線だと思っただけ。

「私も焼きもち焼きなのかも」

「ふ、ふふ……君が？」

ちゅつと首筋にキスをされて、どきどきしてしまふ。

気のせいかしら？ シリウスの息が熱いわ。

「君の焼きもちが可愛い」

大歓迎だ——シリウスに耳元でそう囁かれて、頬が上気する。自分を抱きしめているシリウスの大きな手に、そうつと自分の手をそえると、そこにも口づけられて、セレスティナはどきどきしっぱなしだった。

第二話 時を越える魔道オープン

王立魔道学院は新学期が始まり、教室内は新しい空気に包まれている。

そんな中、セレスティナとシャーロット、エリーゼの三人に、手作りのケーキを差し出したのは、ふくふくとした顔が愛らしいアンジェラである。

「新しいレシピで作ったの。にんじんケーキよ。よかったら食べてみて」

相変わらずお菓子の国のお姫様のように、アンジェラは甘い香りを身にまとっている。淡いプロンドのツインテールを彩いろどるのは、可愛らしいピンクのリボンだ。

「しつとりとしていて、とっても美味しいわ」

口に運んだセレスティナは顔をほころばせる。

「にんじん臭におさが全然ないのね」

「うちのシェフにも教えて欲しいくらいよ」

それぞれの感想に、アンジェラは喜んだ。

「うふふ、嬉しいわ、ティナ。これはね、野菜嫌いの妹達にも好評なの」

アンジーは本当に妹思いのお姉様ね。

口の中で蕩とろけるにんじんケーキを味わっていると、ふいにひらめいた。

そうだわ！

「ね、アンジー。調理時間が短くなるオープンなんてどう？ あったら便利かしら？」

「あら、新しい魔道具を開発するの？ ええ、たくさんのお菓子が作れてとってもいいわね」
アンジェラのふくふくとした優しい笑顔に、セレスティナの心が沸き立つ。

専攻授業が始まると、特別講堂に姿を現したシリウスに早速相談した。

「シリウス！ 私ね、時を操る魔工式を組み立ててみたの！ 見てもらえるかしら？」

興奮のせいでセレスティナの頬が赤い。

彼女が手にしている魔工ボードには、プログラム化した数式がびっしりと書き込まれている。魔工学は魔法の性質を数式に置き換えたものなので、魔道師が魔法語で紡ぐ術式とは違い、数式がベースとなっている。

「時を？」

一瞬、シリウスが目を見張ったように見えた。が、すぐに彼は何事もなかったかのように笑う。

「気のせい、かしら？」

「見せてみなさい」

差し出されたシリウスの手には、セレスティナはおずおずと魔工ボードを差し出した。時を操る魔工式は、新しい魔道具を作るために、ずっと前から構想を練っていたものだ。

拙いと一蹴されるかしら？

どきどきしながら彼の反応を待った。シリウスはそれをじっと見つめ、やがて、嬉しそうに目を

細めた。どきりとするほど甘い瞳だ。

「美しい」

褒められてこそばゆい。シリウスの「美しい」は、彼にとって最高の褒め言葉だ。

「創世の設計図から、これを導き出したのか？」

そう問われて、セレスティナはこくんと頷く。

創世の設計図とは、聖書で語られている、神が描いたとされる「天地創造の設計図」のことである。天と地を創り、人間を創ったというあれだ。

創世の設計図は宇宙の中心、この世の始まりの場所にあるとされていて、古の大魔道師がこれを目にして、数々の偉大な魔法を生み出したという逸話が残っている。しかし、ほぼ伝説と化しているため、信じない者が殆どなのだそう。

だが、シリウスはその創世の設計図を見ることができる。そしてどうやら現代で、実際にそれを目にした者は、セレスティナが現れるまで、シリウス以外存在しなかったらしい。だからだろう、セレスティナが初めてこの創世の設計図を目にした時は、シリウスに大層驚かれた覚えがある。

オルモード公爵邸に引き取られ、いつものようにシリウスに膝抱っこされていたある日、突如、セレスティナの眼前に壮大な宇宙空間が広がったのだ。

煌めく星雲の中に垣間見えたのは、幾重にも重なって存在する精緻な設計図で、思わず手を伸ばすと、それは幻であったかのようにたちまち消えてしまった。

——どうした、ティナ？

かなり挙動不審だったらしい。セレスティナがたつた今日にしたものを説明すると、シリウスは驚いたように動きを止めた。じっと見つめられ、居心地が悪くなる。

——君は創世の設計図を目にすることができるのか？

——創世の設計図？

シリウスの説明で、今し方目にしたものが、聖書で語られている創世の設計図だったのだと理解した。その直後、破顔したシリウスに抱きしめられる。

——そうか、見えるのか！ 流石さすが私のティナだ！ どうだ？ 素晴らしいだろう？ あそこは智慧えの宝庫なんだ！ あまたのインスピレーションを与えてくれる！

——でも、すぐに消えてしまったわ。

——ああ、あれは心が波立っていると思えないんだ。だから、心を凧たきにしなさい。水鏡のように研ぎ澄ます。水が波立つと、そこに映った景色は消えてしまうだろう？ あれと同じなんだよ。

やけに詳しい。セレスティナはおずおずと尋ねた。

——シリウス様は、もう何度も創世の設計図を目にしているの？

——ああ。物心ついた頃からずっとね。

シリウスの顔に浮かんだのは苦笑だ。

——けれど、誰にも理解されないから、今では話すこともなくなってしまった。物質を構成する粒子の話一つとっても、なんの話だ？ という顔をされる。せめて魔工技師達には分かって欲しいと思ったが……創世の設計図から導き出した新しい魔工理論は、どうも突飛とっぴすぎるようで、誰も真

面目に耳を傾けようとしななんだ。そう、君以外は。

そう話すシリウスはなんとも寂しげだった。セレスティナはふと思いついたことを口にする。

——そうだわ！ 聖職者の方なら、創世の設計図の話は喜ぶんじゃないかしら。

だが、シリウスの眉間に皺しわが寄る。

——あいつらを相手にするのはやめた方がいい。嘘つきと罵倒されるだけだ。

随分と苦々しい口調だ。どうやら、聖職者でもない者が、神と交信などできるはずがないと一蹴されたことがあるらしい。

神様と交信……お、大げさだわ！

恐れ多くて、この時のセレスティナは萎縮しじやくしたけれど、神が記した秘技を目にしているのだから、聖職者がそう判断するのも無理からぬことだと思ひ直した。軽く考えてはシリウスに対しても失礼である。

それにしても、創世の設計図が本物かどうかなんて、シリウスの発明品を見れば一目瞭然いちもくりょうぜんのよくな気がするけれど……。多くの人がシリウスの魔道具を「神がかっている」と評するのは、そういった力を感じるからではないかしら。なのに、シリウスは本当に理解されないことが多いのね。

過去に思ひを馳はせたセレスティナは、そう思いつつ、自分が書き綴つづった魔工式に見入っているシリウスを見つめた。

シリウスはいろんな意味で特異だ。エルフを彷彿ほうぼうとさせる美しい容姿が多くの人を惹きつけるのに、感覚の違いから、他者と心を通わせることが難しい。美意識のずれから話は噛み合わず、構築

する理論は難解すぎて、これまた他の魔工技師達と話が合わない。妖蛇と心を通わせる「異能」も、おそらく不理解の一因になっているに違いない。

私は……そうね。シリウスがいるから、ちつとも寂しくなんかいわ。だって、彼が私に対して理解を示さないことなんてなかったもの。いつだって理解してくれる。分かってくれる。私にとってシリウスは最愛の人であると同時に、教師でもあり、道しるべ……いつだって、道の先を照らしてくれる人。

セレスティナの心がほわりと温かくなる。魔工ボードに見入ったままシリウスが告げた。

「私は若返りの魔道具を作った」

「ええ、そうね。とても素晴らしい魔道具だわ」

思い出すだけで、セレスティナの胸がじんつと熱くなる。幼く見えるセレスティナと恋人同士に見えるよう、シリウスは若返りの魔道具を作り、十代の姿になって、セレスティナとデートしてくれたのだ。とても楽しい思い出である。

「あれには、これとまったく同じ数式を使っている」

シリウスにそう言われ、セレスティナは目を丸くする。

顔を上げたシリウスと目が合った。その顔は喜びで輝いているように見える。

「そうだ、ティナ。分かるか？ 君は私と同じ答えに到達したんだ。他の魔工技師達には決して導き出せなかった時の本質を、こうして数式化してみせたんだよ。ああ、本当に君は素晴らしい。最高だ」

甘く囁くシリウスの声は、心をくすぐってくれる。

嬉しい……

「私ね、アンジーやブーシェのような料理をする人のために、時間短縮ができる調理器具を作りたいの。美味しい料理はそれだけで、人を幸せにしてくれるもの。みんなを笑顔にしたいわ」

「ふ、ふふ……人を幸せに、か。君らしい発想だな。存分にやりたまえ」

シリウスの許可を得て、授業時間分も魔道具開発にあて、セレスティナは頑張った。学生で魔道具の開発をするという大抵驚かれるが、セレスティナにとってはもうこれが日常である。

「わー、見事に真っ黒……」

セレスティナの手元を覗き込んだのは、銀髪美少女のシャーロットだ。ここはオルモード公爵邸の厨房である。セレスティナの研究開発は学院だけでなく、当然オルモード公爵邸でもおこなわれている。セレスティナが手にしているのは、黒焦げになったサツマイモだ。

「一瞬でついでなのが凄いけど、これって何？ 超火力なの？」

セレスティナが作り上げた魔道オープンを、シャーロットはしげしげと眺めた。セレスティナは首を横に振る。

「いえ、その、火力は普通のオープンと同じよ……ただ、時間を飛び越えすぎたみたい。五時間くらい焼いちゃったかしら」

「五時間！ それは凄いわ！ 真っ黒になるはずよ！」